OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 19 世紀アメリカのリフォームドレス運動について : 新聞『シビル』の記事から |
| Author(s) | 谷, 紀子 |
| Citation | デザイン理論. 2019, 74, p. 114-115 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/75321 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 19 世紀アメリカのリフォームドレス運動について
## ―新聞『シビル』の記事から―

谷　紀子　京都女子大学大学院家政学研究科博士後期課程

### はじめに

19 世紀中頃にアメリカ合衆国で女性服のリフォームドレス運動がおこり，ブルーマー・スタイルが大流行し，欧米の女性のファッションに影響を与えたが，その後，定着することがなかった。本発表は 1850 年代以降の動きを，新聞『シビル』（*The Sibyl*）を発行した女性運動家と，その記事の内容から，リフォームドレス運動の詳細や当時の社会情勢を明らかにする。

### 研究背景

西洋での 19 世紀の女性の服飾は，ウエストを細くコルセットで整えて長いスカートを広げたスタイルが主流であった。1851 年にアメリア・ジェンクス・ブルーマーが，雑誌で短いスカート丈のチュニックドレスとゆったりとした「パンツ」のスタイルを発表して大流行したが，その後周囲の反対や拒否の為に流行が下火となった。これまでの研究の多くは，ブルーマーズと呼ばれる「ブルーマー・スタイル」に注目されているものがほとんどであり，その後の「ブルーマー・スタイル」についてはあまり報告されていない。しかし，アメリカでは，幾人もの「リフォームドレス運動」家達がその後も運動を続けていた。

### 先行研究と方法

アメリカの歴史学研究家のゲイル・V・フィッシャーの研究や著書は，この運動について触れており，活動家の一人のリディア・セイヤー・ハスブルックが新聞『シビル』を発刊して，「リフォームドレス運動」を推進しようとしたことが分かった。この新聞『シビル』は日本ではほとんど知られていない。そこでこの人物と新聞『シビル』の記事から，その内容を分析，検討して「リフォームドレス運動」を考察する。

### 1. フリーダムドレスから「ブルーマー・コスチューム」へ

「ブルーマー・コスチューム」の始まりについては諸説あるが，アメリカ東部ニューヨーク州のセネカ・フォールズで活動していた禁酒運動家のアメリア・J・ブルーマーが，女性権利運動家のエリザベス・C・スタントンに紹介された治療施設用のドレスから着想したと言われている。それ以前にアメリカ各地で，「フリーダムドレス」と呼ばれた，ゆったりとした「パンツ」を着用した服装が，家庭や共同体の中の閉鎖的な空間の中で既に着用されていた。「ブルーマー」は，アメリカ東部から全米各地へ，そしてヨーロッパへと流行した。当時は，批判や拒否の為に定着しなかった。

### 2. リディア・セイヤー・ハスブルック

リディア・セイヤー・ハスブルック（1827–1910）は，ニューヨーク州ウォリック近くで生まれ，若い頃から短いスカート丈のドレスとトルコ風の足首を絞った「パンツ」の服装を常用した。その服装は世間に認められなかった為に，女性の自由と平等の運動家として生きようとした。彼女は教育を終えて，水治療法のカレッジに通学し，その後，新聞記者になった。また，

ナショナルドレスリフォーム協会の役員も務めた。リディア・セイヤーは，ジョン・W・ハスブルックと1856年に結婚した。彼女は新聞『シビル』を創刊して，記者として記事を書き，編集もこなした。『シビル』は，1864年まで刊行され，各号約8頁で構成され，巻頭頁には，毎号「リフォームドレス」姿の女性のイラスト画が印刷されていた。この新聞は，女性の権利運動と，それに付随する「リフォームドレス」，および健康法の観点から記事が書かれた。

## 3.『シビル』の記事から

ここでは，「リフォームドレス運動」，「ブルーマー」，「リフォームドレスのスタイル」，「女性の権利の不平等」，「女性の有能さ」「読者からの手紙とそれに対する記者の意見」，の視点から記事の内容を取りあげた。まず，1857年1月7日にニューヨーク州の教会で開催された「リフォームドレス会議」についての記事の内容では，参加者は権利運動家や宗教家，水治療法関連など各方面から，男性も多く参加して，リフォームドレスの着用の情報交換を行ったと記載されている。

「流行のブルーマーズ」の記事は，おしゃれな「ブルーマーズ」として，どう着こなしたらよいか，という読者の質問に細かく答えており，興味深い。例えば，「世間に受け入れられるのにはどうすればよいのか」。それには，「ドレスには花綱飾りが付き，白いパンツと外套で，帽子のボンネットでパリ風のスタイルに」と答えている。また，「ドレスの下のアンダースカートの垂らし方の工夫や，刺繍やフリンジの装飾」も提案している。

「リフォームドレスのファッション」については，「長いドレスから『パンツ』を作った後の短いドレスのみ，完成することもできる。形も様々である」という記事からは着用者の好みで自由に手作りされていたと推測される。

そして短いドレスのみで，パンタロンのないスタイルや，スカート部分のない，「パンツ」だけのスタイルのものもあったという記事が確認された。「パンツ」だけのスタイルが存在していたことは，当時の写真からも確認できた。「ブルーマー・スタイル」だけでない，様々なスタイルが，記事から確認できた。また，当時のファッション雑誌については，「有害で，リフォームドレスが注目を浴びないようにしている」とまで書いている。

記事には，女性の法律や慣習，女性の権利の不平等さと，その逆に男性にも劣らない女性の有能性についての記事も見られる。

読者からの記事として，リフォームドレスの女性と結婚したが，家事が出来ない，贅沢のために破産した男性からの手紙が紹介されていた。彼女は，水治療法師の親の強制で「リフォームドレス」を着ていた従順な娘だったのである。新聞の記者の「意見」では，男性には，「外見で判断せずに，その外側を超えて見る事」や，女性には「男性に注意深く，邪魔者にならないように」，「男女は共に働く者になろう」と提言されていた。この記事の例のように自分の意思からではなくリフォーマーになる女性もいた事は興味深い。

## おわりに

新聞『シビル』では，多様な団体や職業，水治療養との深い関連が読み取れた。そのスタイルも様々であった。また，運動と離れた地でも，実用性，防寒性からも農作業時に女性たちの着用が確認された。リフォームドレスは，ナショナルドレス協会では「アメリカン・コスチューム」と呼ばれたが，新聞『シビル』では「リフォームドレス」と書かれていた。1850年代以降もアメリカではリフォームドレス運動が続いたことが分かった。